

これからの先生

2023.8.8

2011年、平成23年、9月21日には、中学校の初任者の授業を参観した。2年生の国語の授業だった。教材は古典だった。『平家物語』扇の的だった。いい生徒だった。授業者の「だれか？」で、たくさんの手が挙がる学級だった。

特に研究授業や参観授業の際に多いのかもしれないが、導入で前時の振り返りが行われる。果たして、本当に必要なのだろうか。必要だとしても、振り返りの方法に工夫が求められる。学習課題は、「“那須与一”の展開を捉えよう。」だった。なぜ、何のために展開を捉えるのか。学習の必要性の問題である。

板書の文字が大きくて見やすかった。声が大きく、話すスピードも速すぎない。生徒に聞きたいときに、「聞きます」「聞いていいですか」と言っていた。生徒は、「いいです」とは言わないだろう。本当は、聞いてほしくないはずである。「いいですか」という授業者の独り言も多かった。同じようなことを言っている教員はけっこういる。生徒は、いいですともだめですとも言わない。「指名しますので、心の準備をお願いします」これもいらない。

音読では、「各自、座ったままで1回だけにかまいません」という指示だった。これだと、全員が最後まで読むとは限らない。音読には、1時間で何度も読ませる工夫が必要である。音読のバリエーションがほしい。音読の引き出しを増やすということである。音読のねらいを生徒に知らせることもポイントである。ペアやチームによる交互読み、グループや全体での斉読、群読などである。また、暗唱テストをやる場合は、書かせるという方法もある。暗唱できていれば書けるはずであろう。一人一人順番に行っていく暗唱テストでは、時間がかかりすぎる。書く暗唱テストであれば、すぐに終わる。そのときの状況により、様々な方法を使い分けることが必要である。

板書をするのはいいが、書き切れなくなって消していた。板書は消さないようにしたい。机間指導では、アドバイスをわざと大きな声でいう場合がある。アナウンスである。机間指導では、個別のアドバイスと全体へのアナウンスを使い分ける。生徒は、他の人へのアドバイスに聞き耳を立てるものである。

今回は、一問一答式の確認で進める授業だった。これからは、生徒の発言やつぶやきを生かせる授業をしてほしい。宿題を出していた。「～をすらすらと読めるようにしてくる」というものだった。このすらすらとがよい。

授業を参観して、これからの先生だと思った。では、この先生は、その後どうなったのか。現在では、福島県の国語教育界の第一線で活躍中である。うれしい。